

板沢武雄先生追悼

丸山, 忠綱 / MARUYAMA, Tadatsuna

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

222

(終了ページ / End Page)

235

(発行年 / Year)

1962-12

板沢武雄先生追悼

丸山忠綱

才。 本会の前会長、板沢武雄先生は昭和三十七年七月十五日午前八時肝臓癌のため自宅でご永眠になった。享年六十七才。

先生は三十二年四月に軽い脳動脈硬化症にかかられ、しばらく静養せられたことがあった。快くなられた後は、煙草は全く、アルコール類もほとんどやめ、節制につとめておられた。ただこの後は、以前の談論風発のご様子が見えなくなり、やや口をきくのがおっくうになられたかに見うけられたのは昔を知る者にとってはいささか心淋しいことではあった。しかしながらその他の点では少しもお変りなく、熱心に研究と教育に身を捧げておられた。一昨三十五年の暮になって高熱をだされ、慢性腎炎の恐れがあるとして、かかりつけの医師のすすめもあり東京医大病院内科に入院された。これには私たちも驚いたが、原因がはっきりつかぬままに昨年二月末軽快、退院せられた。史学科関係者一同ほっと胸をなでおろした。三月末から四月初めにかけての大学院の入学試験には元気なお姿をあらわされた。しかるに四月中旬からまた黄疸となられ、再度、東京医大に入院せられた。こんどは内科には一週間ほどおられただけで新築早々の外科病棟に移られたのである。とにかくということでは五月中旬手術が行なわれ、その結果は、うずらの卵大の胆嚢結石が摘出され、それとともに化膿しているというので胆嚢も切除、摘出された。実は開腹してみると既に肝臓は癌におかされ、手遅れとなっていたのであった。しかしこのことはご長男だけにあかされ、先生はもちろん奥様もご承知ないままに癌の恐れなしという医師の言葉を信ぜられ、健康の回復を喜んでおられたのである。しか

しご年齢のせいもあって手術あとの癒着がはかばかしくなく、先生がぜひとっておられた通信教育夏季スクーリングへの出講も、開講二、三日前に至って医師の退院許可がないため、ついにこれを断念せねばならなくなったような状態であった。七月末不治の病根を懐いたまま退院せられ、夏季休暇があけるとともにすっかり快くなったと大学に出てこられた。そのころ法政大学文学部紀要が従来の各学科ごとに出すというシステムを改め、全学科を一つにしてのものを出すというところであった。先生は私たちの希望をいれて下さって欣然として「鎖国時代における密貿易の実態」と題する刷り上がり七十七頁という大きな論文を物され紀要の第七号第一の巻頭を飾られた。これが先生最後の論文となった訳である。私たちはもとより先生のご病気が癒、それも手遅れになっていようなどとは思ってもよらず、肉体的にはかなり無理なお願いをしたのであった。今にして思えば申しわけない次第であるが、同時に一編の長大論文を完成していたくすがともなったと考えれば、やや気がやすまるの感もないではない。その秋から本年二月いっぱい学年末までは先生がまた割合お元気で活躍せられた時期であった。臘燭の燃えつきんとする前の明るさであったろうか。三月初めの本学の入学試験監督に専任教員が珍しくかり出されることとなった際、先生はおとしにもかかわらず当然の義務なりという訳でこれに参加すると申しでられた。しかしこの入学試験日を前にして再び倒れてしまわれた。

その後はずっと自宅に病臥されたままであった。三度入院、再手術という線は医師のほうから体力が衰えていて今は無理であるとはめられてしまった。もはや無益であるとのそれとなき宣告であったろう。

先生ご自身は珍しく肝臓癌につきものの苦痛を感じられなかったので、かなり後まで快復を信じておられたようであるが、その後の症状は一進一退を続けながら、しだいに確実に死に迫りつつあった。食欲も減って、かろうじて連日注射によって生をつなぐのみであった。こうして病魔と悪戦苦闘の末、七月十五日朝、先生の肉体は永遠の眠りにつかれたのである。

先生の死をきこし召された畏きあたりからは祭葬料金一封が下賜せられたほか、皇后陛下からご供物御菓子一箱、菊の生花一盛を賜わった。東京でのご葬儀は十九日に近くの高円寺二丁目の真盛寺において板沢亀吉氏が葬儀委員長、竹内直良先生が副委員長となり、同寺住職岩田教順師導師のもとにとり行なわれた。ここは生前、先生が街の中には

珍しい閑寂な境内を愛しておられたところであった。当日は非常な暑熱であったが、葬儀には法政大学総長代理多田基学務理事が参列されたほか、本多顯彰文学部長、岡田章雄日本歴史地理学会代表、緒方富雄蘭学資料研究会会長、板沢亀吉氏、法政大学での教え子代表安岡昭男君が切々たる弔辞を呈された。それに引き続いた告別式には多数の学界の関係者や、各方面の教え子たちが参列焼香された。それは先生の学徳の大を物語るものであった。

ご郷里釜石におけるご葬儀は、先生のご住職をされた観音寺において同じ月の二十九日に行なわれ、これまた盛儀であった。ここは先生がその十八世の住職として、戦災にあつて瓦礫の山と化していたのを復興されたところであった。先生の戒名はそれを含みとして中興観音寺十八世僧正本覚院和光武雄大和尚という。和光は先生の号であり、本覚院の院号は本山から贈られたものである。

先生は明治二十八年一月五日、岩手県釜石町の観音寺住職板沢真小雄^{まさお}と妻、喜智の間に、その五男として呱呱の声をあげられた。誕生日は実は元日であったが、役場の吏員が届け出の五日を出生日と間違えたものであるという。先生は母堂との縁薄く、満三才五か月余で明治三十一年五月半ば四十一才の母上を脳溢血で失なわれた。先生は身体はむしろ虚弱のほうであったが明治三十四年四月釜石尋常高等小学校に入学、近い分校に通学し、そこで二年生から四年生に飛び越し進級せられた。尋常科をおえて高等科に進んだ年の初冬、先生は休み時間中ぼんやり二階の手すりによって往來を見ていたところ、うしろで角力をとっていた者にはねとばされ往來に墜落、人事不省に陥るといふ目にあわれたことがあった。

明治四十一年四月には難所仙人峠を越えて遠野中学校に入学された。その年の九月から、父君と懇意の仲であった歴史学者、人類学者、『台湾文化志』の著者、伊能嘉矩先生の家に厄介になることになり、爾來中学卒業に至るまでここに寄寓し、この学者の大きな影響の下に、中学四、五年生のころ先生は史学者たらんことをきめたのであった。先生の寄寓は伊能先生の四十二才から四十七才にわたる。思えばくしき出会ひであった。東北の一隅において、中学生で、史学雑誌、人類学雑誌を読み、考古学の発掘の指導をもうけたとはまず最上の環境であったといわねばなるまい。当時、遠野中学校の内部は乱脈を極めていたので、先生の学問への目ざめは全くこの伊能嘉矩個人からうけた

といつてよかつた。

その間、中学二年生の終り時、明治四十三年二月に五十四才の父君をなくされた。先生は親子縁は薄いほうであつた。その後、先生は学資を梔の育英資金等に仰いで学業を終えられ、社会に出てから数年にわたつて返済せられたのである。大正二年九月仙台の第二高等学校第一部乙類に入学、同五年七月に卒業された。一、二年生当時の校長は名校長の名のあつた三好愛吉先生であり、先生は恐らくこの三好校長の影響もあつたらしく、宗教にあたまを突っ込み、殊に禪にこつた。三年生の時に猛烈な腸チブスにかかり、東北帝大病院に入院九死に一生をえた。大正五年九月に東京帝国大学文科大学史学科に入学、国史学を専攻、同八年七月に卒業した。当時総長は山川健次郎男爵、文科大校長は上田万年博士、国史学科主任教授は三上参次博士であつた。教授助教講師陣には国史で萩野由之、田中義成、黒板勝美、辻善之助、和田英松、宮地直一、村上直次郎、東洋史で市村瓊次郎、白鳥庫吉、箭内互、池内宏、原田淑人、西洋史で坪井九馬三、箕作元八、村川堅固、斎藤清太郎、大類伸の諸先生がおられた。

先生は二高在学中に大槻文彦博士の蘭学に関する講演を聴き、蘭学書の展示を見て以来蘭学に関し興味を有さるるに至つた上、その後維新ごろの書物か何かを読んでいてゲベル隊という言葉がわからず大槻先生に質問の手紙を出してみたところ、早速、根岸御行松、大槻文彦と朱印のある葉書でゲベルとはオランダ語の *Geveer* で、ゲベル隊とは銃隊のことなりとの教示を頂戴した。これがそもそも先生と蘭学との結びつきの最初であつた。その後、大学一年生の暑中休暇に遠野に帰省するや、伊能嘉矩先生から *Campbell's Fornosa under the Dutch* の抄訳を課せられ、これが二年間続いた。先生はこれによってオランダ人の東方進出の歴史の概要を身につけることができた。こうして先生の蘭学史に対する興味なり、基礎なりは民俗学に対するそれとともに既に種子はまかれていたものの、未だ大きく芽ぶくまでには至らなかつたのである。民俗学についていえば、大学在学中、恐らく伊能先生の紹介によるものであろうが、柳田国男先生のお宅に参上、風土記の読み合わせの会合に参加されたことがあるという。当時の参加者は先生の他はそれ以前からの折口信夫、中山太郎二氏であつたという。先生は卒業論文に出雲風土記かを扱うつもりで柳田先生に相談せられたところ、言下にはそれはとても無理だからやめたがよいとめられたのであるという。(先生がいつごろまで柳田先生のところにかよわれたのかは明らかでない。)

当時、大学では古文書を使用する研究が重んぜられていたことから、結局先生の卒業論文は「北畠氏の東国経略」と題するものとなり、主として、中世史専攻の碩学、田中義成博士の指導をうけられた。しかも田中博士は先生が卒業せられると四か月をいわずして他界せられたことを思う時、まことに奇しき縁であったというべきであらうか。なお、この論文作製に際し、史料編纂掛において渡辺世祐、八代国治両博士にさんざんしぼられたとは先生後年の述懐である。

さて大学を卒業するや、先生は三上先生のお世話で宮内省図書寮に勤務されるに至った。実はこの外に萩野先生の文部省維新史料編纂局、大類先生の早稲田中学校などの就職の話もあり、諸先生ご相談の上このようにきまったものであるという。そうして図書寮に入ると、先生は伏見宮の皇親実録編修に配属となった。当時図書寮頭は一代の碩学鷗外森林太郎博士であった。先生が出動される早々、無造作に鷗外博士自ら一東の女房奉書を持ち出して来られ、その整理を命ぜられたり、外国関係文書の整理、分類、カードのとり方などてずから教えられた。こんな具合で、最初の一か月ほどは、先生が、前にも後にも、あれほど勉強したことはなかったと述懐されるぐらい必死になって努力された。古文書の文字に読めないのがあると、そのままの形を手帳に写し、それこそ寝ても覚めてもにらめっこを続けられたとか、文書中にわからぬ言葉があり、宮中言葉らしいので永年勤続の小使さんにひそかに聞いてみたところ沢庵漬けのことであったとかで、それからすっかり帝大出学士の気張ったしこりがとけ、わからぬ言葉はこの人に聞くことにしたなどという裏話も生じた。

先生の同室には当時囑託として芦洲池田四郎次郎先生がおられた。森寮頭の発議で、池田先生から書経の講義を聴く会がつくられ、大学出たての先生も勿論聴講せられた。ここでは池田先生の該博深遠な学識に驚歎するとともに、誰よりもよく下読みをして来られ、最も多く質問せられる森寮頭の態度にも深い感銘を与えられた。先生の図書寮勤務は一年八か月の短期間であったが、その間碩学鴻儒に接しえたことは、先生の学問の上に大きな好影響を与えたものであった。大正十年三月先生は、大学時代研究室で世話になった大谷勝真先生から学習院に来ないかとの話をうけ、図書寮を一身上の都合という名目で辞任され学習院の講師となられた。図書寮をやめるのは惜しいが、若いうち勉強をしておかなければという気がしていた時であったから、自由な時間のとれることは大きな魅力であった。た

またま先生はこのころ結婚せられたが、ますますフアイトを燃され、「公家文化と武家文化との交流」というテーマで東大大学院に入り、三上博士を指導教官とせられた。しかるに間もなく翌十一年六月学習院教授に任ぜられ、大学院は自然消滅となった。この際、在学中であったので三上先生のもとに参上、専任の話は断ってしまいましょうかとうかがわれたところ、何をいうか、大学院を終えたらどこか地方の高等学校へでも世話をしやらねばと思っていたところだ、大学院などに執着せずに早くこの結構な話にのるようにせよ、とお訓しをうけそのままリポートも提出されずにすんでしまったとのことであった。

先生が学習院に奉職せられ、海外留学にでかけられ、蘭学史家として立たれるに至る間の事情は、先生の主著『日蘭文化交渉史の研究』（昭和三十四年刊）の巻頭に掲げられた「序にかえて」のうちに詳しい。左にそれを引用しよう。

「今から考えると、学習院というところは有り難いところであった。やろうと思えば時間の余裕もあり、図書館を利用して随分勉強が出来た。後で阿蘭陀風説書の研究のもとになった荷蘭上告文を図書館で発見したのもこの頃のことであった。今はっきり記憶しないが、学習院というようなところにあつては、史料編纂所や図書館でなければ研究出来ないようなことを終生の研究テーマにすることは不利である、ひとつ独自の領域を開拓して見たいと、いうようなことで、久しく忘れかけて居った蘭学史の研究をはじめめる気になった。

南洋協会の夜学に通って朝倉純孝先生からオランダ語の手ほどきをして頂いたのはそれがためであった。とかくするうちに、宮内大臣は一本喜徳郎先生、学習院長は福原鑠二郎先生の時代となって宮内省在外研究員制度が設けられ、語学、西洋史、物理、化学、数学と続々研究員が出かけるのを見て、うらやましくてならない。院長に恐る恐る御伺いして見ると、国史のものなど西洋に行つて何するといふわけだ。そこでかねがね蘭学史の研究を志していることを話すと、親切にも、それならよく説明すれば宮内省の許可がえられるかも知れぬと、いろいろ尽力して下さった結果、学習院五十年史を編纂せよ、その慰労の意味を加えて出してやろうということになり、本紀の部を書き上げて洋行することとなった、三十二歳の時である。

昭和二年四月二十三日に出発して、昭和四年二月十二日に帰朝するまで、在留国は英、独、伊、蘭、バタビヤとなっていたが、期間の大部分をオランダで送った。すべてがなつかしい思い出である。私の生涯のうちで一番恵まれ

た時であり、最も勉強した時であった。ハーグの国立文書館のバイルスマ博士 Dr. R. Byisma ライデン大学教授ダ・フィッサー博士 Dr. M. W. De Visser は親切に何かと便宜をはかってくれた。また時の公使広田弘毅先生をはじめ三宅、諏訪、池田氏等館員の方々、当時外務省の留学生であったパキスタン領事竹中均一氏から一方ならぬ御世話になった。恩師黒板勝美先生をオランダに迎えて共に数日を送ったこと、ロンドンでは維新史料編纂官大塚武松先生と同宿で、折から留学中の京城大学教授大谷勝真先生と相往来したこと、更にオランダに帰って幸田成友先生という好伴侶を得て日夕相親しみスペイン旅行を共にしたこと、村上直次郎先生の再遊を迎えて、ハーグの文書館に、スペインのセビヤ印度文書館に、そして帰朝の途次バタビヤの文書館までお伴をして親しく指導を頂いたこと、バルリンでは村上先生の紹介状をもってわが国、史学界の恩人リース先生 Dr. Ludvig Riess を Derfanger Str. 25 Berlin W. 35 に御訪ねしたことは、同先生が間もなく（一九二八・一一・二七）亡くなられたから、恐らく日本の史学研究者として私は最後の訪問者ではなからうかと思う。楽しい思い出はつきないのである。」

この留学中にえられたところはもちろん、留学中に採訪された史料はその後における先生の日蘭文化交渉史、蘭学史研究上重要な働きをなしたものである。

昭和四年二月帰朝せられるや間もなく帝國学士院及び史料編纂掛から日蘭関係史料、欧文日本史料の調査を囑託された。こうして先生の蘭学史家としての地位は確立して行った。

大正十四年成蹊高等学校の講師となり、外遊後、昭和四年から再び講師を囑託せられ昭和八年三月に及んだ。

昭和五年春には女子学習院の講師もかね、昭和十二年七月に至った。黒板勝美先生の推挽によって昭和八年度、十年度、十二年度には東京帝國大学文学部の講師を囑託され、また昭和八年暮以来、日本大学の講師となつて終戦後追放時までこれが続けられた。昭和十三年三月、丸十七か年にわたつた学習院教授の職を辞し、東京帝國大学文学部国史学科の専任助教授に就任された。定年退官せられた辻善之助先生の後を襲つたものである。それは既に日華事変が起つて九か月後のことで、爾後日本は急坂を転げおちるよう太平洋戦争から敗戦に至つた。先生はその間昭和十四年暮には九州帝大の講師として集中講義をされたこともあり、昭和十七年五月には教授に昇進された。国史学そのも

のが、戦時中は利用される向きが多く、先生もまた国家の至上命令の下に各方面に活躍された。戦局いよいよ不利を加えた昭和二十年五月二十六日の大空襲で先生のお宅は全焼した。終戦を迎えるや、主任教授平泉澄先生が職を辞して郷里に帰られたので、その後をうけて主任教授となり、坂本太郎先生などと力をあわせ国史学科としても空前の危機を迎えた時期に当って国史学科取りつぶしなどの噂すらとぶうちに、自家のことを顧みるとまもなく学科の再建に心血を注がれた。澎湃たる革命的風潮のなかにあつて学科内にもいろいろの動きがあり、先生の苦勞はひとかたならぬものがあつた。昭和二十一年五月進駐軍の命令で教職追放令が施行されるに至るや、先生は東大文学部の審査ではパスされたにもかかわらず、後になって文部次官提訴をうけて昭和二十三年一月追放のうきめを見られるに至つた。そこで先生は釜石に帰られ、艦砲射撃によってこっぴどみじんになっていた観音寺の再建に全力を傾注され、同族板沢亀吉氏や郷里の人々の絶大な援助をえて、みごとにこれを成就された。(これよりさき昭和十四年に先生は、ご長兄ご逝去のあとをうけて観音寺をつがれることになり、正式に僧籍(天台寺門宗)にはいっておられたのである。)

この間東京に残られたご家族がたのご苦勞もひとかたならぬものがあつた。

二十六年秋に至り、追放解除となり、翌二十七年四月から法政大学文学部教授に就任された。それはたまたま史学科大学院開設の時に當つていた。爾後先輩藤井甚太郎先生と力をあわせて史学科全般の基礎を固められた。昭和三十三年春、藤井先生が名誉教授の称号をうけられるとともにご退任になられたあとをうけて昭和三十三年、三十四年度には主任教授となり、停年延長後はその地位を竹内直良先生に譲られた。しかし先生は依然、史学科の大黒柱として、内外に重きをなしておられたのであつた。

また出京せられた後、二十八年四月より神奈川大学の講師を委嘱せられ、昭和三十二年五月までそれを続けられた。昭和三十年四月以降は日本大学大学院講師を兼ねられ、ご逝去に至つた。

先生の学問 先生の学問について私が云々するなどおこがましい限りであるが、幅が驚くほど広く、しかもがっちり実証的であるところにその特徴があつた。幅の広さのもとには既にのべたように先生が中学生時代に伊能嘉矩先生についたことにあるといえよう。先生は民俗学、人類学、考古学について一隻眼を有しておられ、大学の卒業論文に中世史を選ばれ、更には図書館に入って苦勞されただけあつて古文書古記録にも精しく、大学院の研究テーマには文化

史を選ばれ、中年以降は近世史、それも特に日蘭文化交渉史の大家として学界に重きをなされた。いっぽうご自身書籍にあったせいでもとより仏教史はお手のものであった。先生は、戦時中すでに学位論文を作製すべく心がけられ、史料を集め、稿に手をそめられ、それをカバンに入れて折あるごとに手を加えておられた。しかるにお宅の焼失に際しついに書斎の中でこの草稿は多くの史料、書籍とともに灰燼に帰したのであった。戦後、先生は非常な決心をされ、東大の研究室に残ったノートやその他によって、大車輪で従来のご構想に基づいて論文にまとめあげ、成稿を出版社に渡されたのであったが、序論の部分が世に出ただけで、残りは同社がその移転に際し無責任にも原稿を紛失してしまい、先生のせつかくのご努力も水泡に帰してしまった。昭和二十九年暮、先生は『日蘭文化交渉史の研究』で文学博士の学位をえられた。これは今までと構想をやや変え、従来の先生のこの方面の研究を集大成し、脈絡をつけられたものであり、蘭学研究史上に一つの金字塔をうちたてられたものであった。

先生の学界活動 先生は昭和十四年三月末に史学会評議員に当選され、十五年二月、日蘭協会評議員、理事に就任、終戦を目前にひかえた二十年四月には学術研究会議のいくつかの部の幹事をつとめることになった。戦後の追放その他で先生の学界活動は表面的に一時中絶となった。しかし、東京に帰られてからは各方面に活躍を再開せられた。三十三年十月にはその夏、逝去せられた藤井甚太郎先生の後をうけて、日本歴史地理学会の会長に就任され、なぐなられるまでその地位におられた。また蘭学資料研究会の有力メンバーでもあられたこというまでもない。昭和三十六・七年度は日本人類学会の評議員でもあられた。

先生の社会活動 社会的な活動という点になると、もとよりそれは先生の日本史の学者としての本来的なものに基づくものであるが、戦時中の上からの命令による各種の委員のごときものは主として東京帝国大学の教壇に立っておられるという立場によるものであった。

戦後、法政大学の教壇に立たれるようになってからは、昭和三十一年十一月末から三十六年六月末まで文部省の委嘱をうけ教科用図書検定調査審議会委員をされ、三十二年十月末から三十六年三月末までは私立大学研究設備審議会委員をつとめられた。前者においては先生は三十三年十一月第二部会長すなわち社会科学部門の部長をされたこともあった。ちょうど制度が改正せられた時に当り、先生は直接、世間で大騒ぎをした問題の渦中に入られたことはな

かったが常に毅然たる態度を持してこれを崩されるようなことはなかった。

先生と郷里 先生と郷里釜石との関係は、昭和十四年先生が仏門に入られ、観音寺住職事務取扱いを命ぜられた時に、再び濃やかなものとして復活したといつてよからう。

そうしてそれに先立つ昭和十三年に東大専任教官になっておられたことと、観音寺が名刹であることが相まって、先生は釜石出身の名士としておもしろもせぬ存在となっておられた。先生は昭和十五年十二月には在京遠野中学同窓会の副会長におされ、更に戦時中、十八年四月には小石川表町に釜石市出身学生のために寮を開設され、同年六月伝通会館において在京釜石出身学徒会結成式を行ない、推されて会長の任につくなど、大いに郷党のためにつくされるころあった。

教職追放にあって先生が釜石に帰られ、観音寺復興につくされるようになると、岩手県や釜石市も、この郷土出身の前東大教授をほっておくはずもなく、先生は復興の仕事以外に結構多忙の日々を送られたようである。昭和二十五年には釜石線全通記念として市からの依頼により『釜石市年表』を著わされたごとき、まさにその一例であったといえよう。

追放解除後間もなく昭和二十六年暮には、盛岡地裁から二十七年度の司法委員、各種の調停委員に選任、委嘱をうけた。こえて二十七年一月には岩手県社会教育委員になられた。

ちょうど、このころは先生が法政大学の教授となられる時期に当っており、先生はしばらくの間は東京と釜石の間を往復するという、政治家並みの忙しい月日を送られた。先生がお寺のほうの心配が一応なくなつて東京におちつかれてからも釜石との縁は逆に深くなつたかの感さえあった。それは三十五年四月以降、釜石市誌編纂委員になられ、鋭意本格的な地方史の編纂に当られたことによる。殊にその年の夏季休暇はずつと大学院の学生の研究指導をかねて都下府中にある遠野南部家の菩提寺東郷寺に南部家文書の採訪に当られた。この仕事は先生にとってまことに楽しいものであったが、同時にやはり、健康上は深刻な悪影響を与えたものであったことも発病、入院がその秋から暮にかけてであったのを考えると否めない事実であった。先生は、釜石市誌が中途のままでご他界になられたのであるが、この点は往年の研究を徹底的に改訂増補せられた『おらんだ風説書集成』の未出版とともに、先生にとって大きな心

残りであったことと推察される。

先生と仏教 先生は元來仏門の出である。二高時代に禪にこったなどということは、まさにこのことによるころ大であった。しかし長兄がお寺をつがれ、それ以外の方は銘々思い思いの方向に進まれたのであって、ただ長兄以外では先生が最も仏教に近い関係の方面に進まれたというにとどまる。前述のように昭和十四年長兄ご逝去の後をうけて僧籍に入られてからは、まさに一面お坊さんとしての生涯でもあった。昭和十四年十月七日準教師を出発点として同年十二月二十五日律師、昭和十六年三月末日、権大律師に補せられ、即日天台三派合同について大律師となっておられた。戦時中、先生は僧籍に入られてから日は浅かったけれども、それまでの閲歴、学識などからして、宗門としても大いに先生を推重し、先生は各種の宗門の委員に任ぜられたのであった。

戦後、昭和二十三年、権少僧都になられた年に観音寺復興入仏落慶法要を行ない、二十五年の暮には平和観音堂落慶入仏供養を執行するに至った。その間、他人に頭を下げることに嫌いな先生がいかに苦勞され、忍んでこの業を成就せしめられたかは想像の外であったろう。二十八年九月には更に板沢亀吉氏の尽力で薬師堂の落成を見るに至って、前年春以來法政に勤務されるに至った先生としてもその責の大部分を果され、心の底からホッとせられたに違いなかった。その功によってか、二十八年十一月に少僧都、三十一年十月には権大僧都、三十二年三月には大僧都に補せられ、きわめて順調に進まれた。大僧都になるとともに寺門宗の教学部長に任ぜられ、翌三十三年五月にこれを辞し、教学審議会委員を命ぜられた。三十五年四月権僧正に補せられ、宗機顧問に任ぜられた。三十七年七月先生のご逝去とともに僧正に昇補、また寺門宗本山から本覚院という院号が贈られ、多年の先生の宗門に尽した功に酬いるところがあつたのである。

先生と皇室 なお忘れてならないのは、先生の皇室に対する関係である。先生が大学卒業後初めて職を奉ぜられたのが宮内省図書寮であり、ついで学習院に移られ、丸十七か年在職せられたのであるから、自然、皇室との関係が生ずるに至つたのである。明治人である先生は皇室に対する崇敬の念はあつたものがあつた。

先生は、昭和十二年五月十日「中御門天皇ノ御事蹟ト御時代」について天皇、皇后両陛下にご進講申しあげたのを初めとして、十四年三月十六日には「宣化天皇御事蹟」について、同年四月五日には「後鳥羽天皇御事蹟」について天

皇陛下に、同年九月二十六日「後醍醐天皇御事蹟」について両陛下に、進講せられた。また皇后陛下には、昭和十三年三月十四日から数年の間、毎週一回、日本歴史について進講せられ、終戦後も二十年十二月三日から先生が追放にあわれるまでやはり毎週一回進講せられた。皇后陛下はその間、しばしばいろいろな物を下賜せられ、また先生が追放と決定するや、親しく御前によばれ、生活のことを案ぜられ、いかなる境遇に至るも学問を廃することなきよう懇篤なお言葉を賜わった。その後も釜石に真綿や羊羹などを送られ、こまやかなお心遣いを示され、先生はこれを深く感佩しておられた。終戦後の混乱せる世情のうちにあつて先生は東大国史学科の再建に努力せられるとともに、昭和二十年十二月二十二日夜分には御文庫において天皇、皇后両陛下に拝謁を賜わり、種々ご下間に奉答した。その二十七日夜は高松宮御殿において高松宮殿下のご下間に答えられた。二十一年一月二十二日、二十九日には皇族方の懇話会において神道問題について進講せられるところがあつた。その年の十一月十三、十六日には赤坂離宮において皇太子殿下に「蘭学の話」を進講せられた。法政大学教授になられた後も、昭和二十八年四月から一か年間義宮殿下に日本歴史のご進講をせられた。先生と皇室の關係は終始一貫して変らぬものがあつた。

先生のお人がら 先生は人後におちることを徹底的に嫌われた。先生はよく沼田頼輔博士が大変なまけ嫌いであつた話をせられたが、それは実はそのまま先生ご自身に通ずるものであつた。先生は愚痴らしいものをこぼされたい。先生が戦災に遭われ、各所の仮り住居を転々とせられ、学科内部学生からの突き上げをうけられ、ついで無理無態に近い追放をうけられた前後は愚痴の一つもこぼしたくなり、弱音の一つもはきたくなくあつたが、先生は絶対にそうされなかつた。強情我慢でもあつた。そうしてかなり釜石地方の方言でいう短腹たんぱら(短気)であられ、なかなか人物評価は点がからく辛辣な月且もされたから、敵をつくられた面もなかつたとはいえない。それは先生自身が学者としてきわめて有能であられたばかりでなく、事務的な才腕においても優れていたことのほか、幼少時から独り部屋に引きこもつて本を読むのを好むといつた人嫌い、どちらかといえば本来的には交際下手であつたその天性に基づくところ大であつたのではなからうか。学生に対しても厳格な、辛辣な態度で臨まれたので学生は皆ちりちりしてゐながら、その博大な学識が学生の評価を超えたものである点は別としても、先生の中にひそんでゐる人間的なあたかさ、人なつっこさの反面にひかれるものがあつたようである。また先生には学者たる面とともに教育者としての

面が強かった。それは先生が多年皇族方や華胄界の子弟の教育に当られたところから強化せられた向きもあろうが、元来先生の本性に教育者が大きく存在していたのである。講義や演習や史蹟見学、史料採訪などに際しての学生に対する態度は厳格をきわめたものであったが、晩年はやや好々爺化された。しかし、学問を志すものが、参考書類の著述にうきみをやつすようなことを極度に嫌われた。学風は実証的にながちり進むことを好まれたのであるが、それ以外のものに対してそっぽを向いているというとはなかった。歴史家にはやはり歴史家としてのセンスが必要だといわれたが、ただ己の能力を計りえずに偉そうなことをいうのをこっぴどくたたき、冷笑されただけである。他人の業績、学力に対する評価も、学問的にはきわめて公正妥当であった。それは思想的立場を異にしている人に対しても同様であった。かつて法政大学文学部にある新制高等学校の教師をしている人から学位請求論文が提出されたことがあった。今日でこそ、旧制博士が大量に産出されたので高校の先生で学位を得た人も珍しくないが、当時はまだ暁天の星どこの話でさえなかった。文学部教授会ではむしろ篤学の士に対する世間にさきがけての学位授与に熱意をもっていたから、それだけ論文の内容については慎重以上に慎重な審査を期していた。そのため少々時日がかかっていた。たまたま先生が釜石から出て来られたばかりのころであったと記憶するが、教授会から参考意見を徴せられた先生は、この論文を読まれるや内容は立派なもので学位を与えるに少しも躊躇する必要なしと教授会で明言せられたので、その後はいわば一瀉千里に進行、確定したことがあった。そうした際の先生はむしろ一本気ですらあった。教授会における先生の態度も、あまり発言せられるほうでもなかったが、いよいよの際のご発言は確信に満ちたものでテコでも動かぬといったふうが見られた。

先生は昔風のところがあまり余り好まれず、ニュース、カレントトピックス、角力、野球の中継のほうかは落語ぐらいしか聞かれなかった。落語は大変お好きであったようだ。職業野球では巨人軍の絶対的ファンでいらっしやった。テレビがはいりようになってからでもこの傾向は全く変れなかった。知識の広い先生も俗的な知識では必ずしもそうでなかったらしく、釜石から出京せられたころ、ようやく一般化しつつあったニコヨンという語を知っていらっしやらなかったのにお子様が大いに笑われたこと、頭が古いと攻撃せられた。釜石ではこんな言葉はまだつかっていないから、まるで今様浦島さ、と苦笑しながら話されたこともあった。先生はまた既に二高在学中から

宗教の問題に深入りされたのであるが、東大に進んだころからは藤田靈齋師の首唱される修養団体養真会に入られ熱心な会員であった。先生のご結婚の媒妁も同師がして下さったほどであった。後、先生も多忙になられるにつれ、しだいに会合に出席しかねるようになったが、その仲間の人たちの結びつきは固く、多くの会員はいずれも今日なお日本の社会の第一線に立って活躍しておられる。先生が常に何ものかを求め真摯な生活を送られたことは先生の天性であられたに相違ないが、ご両親に早くわかれられたことも大きな関係があったろう。先生が厳格のうちにもお子様がたを鐘愛せられた一因もここにあらう。そのお子様がたはいずれも学業を終えられ、上のほうの方々は既に一家をなしておられる。半世紀近く内助の功をつまえた奥様は先生のご冥福を祈られつつ静かな日々を送っておられる。

最後に先生が蔵書印などに用いられた「愛亭」の雅号はその姓と名のローマ字のイニシャルI・T.をもじったものであることをつけ加えて筆をおこう。